

人形のまち・吉浜

祭りを彩る

細工人形と菊人形

高浜市立吉浜小学校教頭

増田 洋喜



毎年5月上旬に行われる「花のとう」(春の作占い行事)の際に、吉浜地区の宝満寺と柳池院に細工人形が奉納されます。細工人形は自然の素材で飾った等身大の人形を使い、歌舞伎やドラマの名場面、歴史上の出来事などを再現するものです。

11月上旬に行われる「人形小路菊まつり」の際には、菊師の手がける菊人形が会場に展示されます。

細工人形には木の実や貝殻などが、菊人形には根が付いたままの生きた菊が装飾の材料として用いられます。実はこの二つの人形には共通点があり、これらの装飾を取り付けるベースとなる胴殻の部分は全く同じ構造なのです。

細工人形の起源

細工人形の起源についてはいくつかの資料があります。柳池院の縁起によると、堂宇再建を喜んだ地域の人々が

作って飾ったのが始まりとされています。

昭和9年発行の冊子『吉浜細工人形を語る』では、安政4年(1856)の宝満寺の御開帳に際して飾られた作り物が「現在の細工人形の根底であり、出発である」と記されています。

さらに同冊子には、明治26年に行われた柳池院の御開帳の際、自然の素材だけを使って装飾する吉浜地区ならではの形が確立されたと記述されています。

その後については、『高浜市誌』に記録が残っており、明治35年から柳池院の「花のとう」に合わせて細工人形の公開が始まり、翌年には宝満寺の会場も加わり、新作を披露する恒例行事になっていったと記されています。

菊人形の起源

菊人形の歴史は、江戸時代の文化年間に江戸で流行した菊細工が始まりで

す。初めは富士山などの名所の風景や獅子などの動物を菊でかたどった作り物でしたが、遅くとも天保年間には頭を付けた人形を使ってストーリーを再現して見せる現在の形に近い菊人形が作られていたようです。

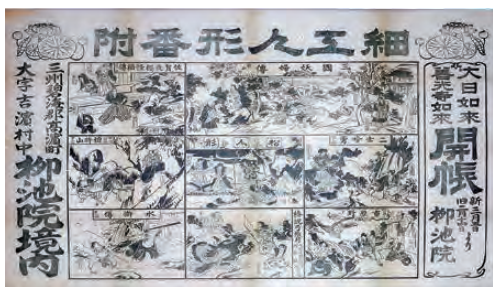
細工人形と菊人形の盛衰

吉浜地区の菊師たちは、最初は苦勞しながらも、プロの集まる興行の現場で職人としての腕を磨いていきました。万松寺での興行が盛になると、吉浜地区の菊師も名古屋だけでなく全国各地

地へ出向くようになり、また現場を取り仕切る親方として活躍する者も現れました。菊人形の仕事は、吉浜地区の人々の貴重な収入源となると同時に、習得した知識や技術が細工人形にも反映され、細工人形もさらに見応えのある洗練された出し物に発展していきます。大正期には行われなかった御開帳ですが、昭和3年に宝満寺、昭和9年に柳池院で開催されると、細工人形が飾られ、露店やサーカスなども並び、大盛況となりました。20場面以上を見せる大がかりな展示になっても従来どおり観覧料は取らずに公開しました。

それでも、番付(リーフレット)や絵葉書の売り上げ、御開帳のお賽銭で地域は潤い、神明社本殿や芝居小屋の建設費用の一部にも充てられました。

このように広く楽しまれるようになった細工人形でしたが、昭和20年代は戦後の混乱や卓越した技能をもつ職人の高齢化により、勢いに衰えが見られ始めます。そこで昭和30年に吉浜細工人形芸術保存会(現



番付(リーフレット)

在の吉浜細工人形保存会)が発足し、技術の保存や後継者の養成に取りかかり、昭和39年には「吉浜細工人形つくり」として愛知県無形文化財に指定されました。

一方で、菊人形興行は戦後復興期から高度経済成長期にかけて再び全国で盛んに開催されるようになり、吉浜地区の菊師たちが全国の会場で菊人形作りに励みました。平成に入ると、嗜好の変化や後継者不足等により、興行としての菊人形は縮小に向かいました。こうした背景から、平成28年に「菊人形づくり」が高浜市無形文化財に指定されたのです。

細工人形・菊人形の制作過程

①殻組み(胴殻作り)

人形の体になる胴殻は、巻藁と呼ば



胴殻作り

れる、藁で包んだ竹ひごに糸を螺旋状に巻いたものを組み合わせて作ります。まず、人形にする人物の年齢や性別、背格好などを考えて調整した芯木を支柱に固定し、それに巻藁をめぐらせま

②細工(装飾)

細工人形いばんの特色は、衣装に施される細工です。自然の素材の持ち味を生かし、仕上げていきます。一見した時に何でできているか分からず、細部を観察してはじめて材料の正体に

気づくような意外性が細工人形の醍醐味です。質素な材料と鮮やかなできばえのギャップが大きければ大きいほど面白味が増します。吉浜地区の人々は素材の調達に傾ける情熱が強く、設楽町の段戸の山中までコケ類の採集に行ったというエピソードも残っています。

③菊付け

菊人形には、菊師が扱いやすい「人形菊」と呼ばれる特別な菊が用いられます。花が



細工人形

先端に集中し、枝がよくしなり、根の量が多い菊です。根ごと掘り出した菊を使うので、花が美しい状態で長持ちするよう根を湿らせておく必要があります。そこで、根を水苔で包む根巻きを施します。この部分は玉と呼ばれます。菊人形一体につき、およそ百株以上の菊が必要になるそうです。菊付けの作業では、玉の位置が花より上に来るようにして菊を胴殻の中に差し込み、枝にひねりを加えながらU字型に曲げ、巻藁にくくり付け

ます。菊が少ないと胴殻が透けて見えてしまい、また多すぎると厚みで胴殻の形がばやけてしまうので、適量を見極めるのが肝心です。特に難しいのは左右の襟が重なる部分で、菊を上手に操ってV字状に開いた着物ならではの形をくつきりと表現しなければなりません。

人形一体の菊付けを完了するには、熟練の職人でも丸一日は必要です。本校の子どもたちも、総合的な学習の時間等を使って、地域の方と菊を栽培し、胴殻を作り、この難しい菊付けにも挑戦しています。



菊付けに挑戦する子どもたち



菊付けの途中過程

歩いてみたい「人形小路」

県の無形文化財に指定されている吉浜細工人形を見ながら散策を楽しめる約800mの散策路「人形小路」が整備されています。道中には細工人形が展示された無料休憩所や、本稿でも紹介した宝満寺、柳池院などがあり、のんびりと散策が楽しめます。休日にぜひお越しください。



人形小路の会HP

主たる参考文献
「新編高浜市誌 高浜市のあゆみ」